# 昭和前期の情報環境と祖神道信者の地理的広がり

## ―「長洲の生神様」松下松蔵への手紙等を手がかりに―

井上順孝

### はじめに

十九世紀より今日に至るまで、日本には多くの新宗教が形成されたが、その形成にあたり中心的、かつ決定的な役割を担った人物に対し、新宗教研究では通常教祖という概念を適用する。教祖に関する研究は教祖論として括られ、教祖のライフヒストリー、思想、その他多くの研究テーマが存在する。教祖と信者とのかかわりについても、弟子集団の形成や中心的信者がどのように形成されたかなどに関心が寄せられてきた。しかしながら、そもそも信者たちはどのような情報ルートによって教祖を知ったのか、そしてどのような手段で教祖とのコミュニケーションを行ったのかということについての実証的研究は比較的乏しい。それは第一にこうしたことを論じるための一次資料があまりないからである。またあったとしても、研究資料として用いる場合には、プライバシーの問題などいくつか制約が生じる。

信者たちがどのようにして、教祖を知ることになったかを考える上で、その時々の情報メディアのあり方を考慮することは非常に重要である。今日のように教祖自らがインターネット上で情報を発信できるような時代であれば、世界の多くの地域で比較的短期間でその人物の情報に接しうるが、そのような情報環境は二十世紀末になって出来上がったものである。近代日本に出現した教祖の場合、その人物の存在について人々が知りうる主な手立ては、二十世紀半ばくらいまでは、口コミや印刷物などであった。そうした時代に教祖が多くの信者たちにどのようにして知られるようになったかの情報ルートを確認することは、なかなか困難である。

本稿で扱う祖神道の教祖松下松蔵については、彼を頼りにした信者たちから寄せられた多くの封書や葉書、そして電報が熊本県の教団本部に残されている。二〇〇二年に本部を訪れたとき、その存在を知り、その一部を閲覧する機会が得られた。一見して非常に貴重な資料であることが分かった。これにより一九二〇年代末から四〇年代にかけての時期、信者たちが松蔵に何を求めたかを読み取ることができる。また、郵便物を発送した人の住所や消印、また電報の発信局名から、信者がどのような地域的広がりをもっていたかがおよそ推測される。教祖とのつながりを求める人々の数の時間的な変化もいくらか読み取れる。個々の依頼の内容の分析はプライバシーに関わることであるので、あまり具体的には紹介はできないが、大半は病気に関わることがらであることが分かった。これらにより信者たちの推測される地理的分布については、ある程度の量的な分析が可能である。送られてきたものがすべて教団本部に残っていたわけではなく、また文字がかすれたり、紙の腐食が進んだりして、封筒や葉書に記された文字、あるいは内容が読み取れないものもあったので、閲覧できたのは一部ということになる。それでも今回分析の対象にできた封書・葉書・電報は合わせて一万三千点余にのぼる。この時期の新宗教の広まりを考える上で、滅多に得られない非常に重要な資料であることは間違いない。

本稿ではこの資料について主として量的な分析を行うことで、当時のメディアが新宗教の教祖についての情報の広まりにどのような影響を与えたか、また教祖についての情報の広まりは、地域的にまた時系列的にどのようなものであったかを論じる。内容的には病気治しをはじめ切実な願いが読み取れるものも多く、当時において、新宗教の教祖に何が求められたのかを考察していく上でもきわめて重要な資料である。内容面についての細かな考察は別稿に譲らざるを得ないが[1]、その特徴的な傾向については、地域的広がりや時期とも関係することがあるので、若干触れることにする。

## 一　情報の広まりに雑誌メディアが果たした役割

松下松蔵（一八七三～一九四七）は昭和前期に「長洲の生神様」として一時期全国的に有名になった。有名になったきっかけは、新聞の連載と雑誌での紹介であった。一九二五（大正一四）年から二九（昭和四）年にかけて『九州毎日新聞』の記者が松蔵の宗教活動



を取材し、その体験記を連載した。これによって松蔵の活動、とくに「お手数（てかず）」と呼ばれる独特の儀礼が少なくとも九州地方に知られることになったと考えられる。お手数は手あるいは笏によって治病その他を祈願するもので、現在でも同教団で後継者によって行われている。

ところが、一九三一年のことであるが、雑誌『主婦之友』の十一月号で、松蔵による癒しの様子が紹介された。これによって九州に偏っていた情報の広まりが一挙に全国的なもの、さらには国外に及ぶものとなった。

『主婦之友』に掲載された記事の見出しは、「神か？　人か？　活殺自在の霊力者！！　長洲の生神様松下翁を訪ふ」というもので、「特派記者」がレポートしている。記者が事前に得ていた情報は「長洲の生神様は世界を見透すことができる」というもので、一度聲を掛ければ、目が見えない人も見えるように、足の悪い人も起って歩けるようになり、その奇蹟はイエス・キリスト以上のものという噂であった。

記者は噂を確かめるべく、当時の熊本県玉名郡腹赤村字上沖州にある松下松蔵のもとを訪ねた。鹿児島本線の大牟田駅から二つ目の長洲駅に降りると、駅前に「神様行」と記されたバスが待っていた。着いた家の二階の一室で記者は松蔵と対面した。そのときの相貌を次のように記している。［もとの記事では漢字にルビがふってあるが、引用ではルビは省略した］

「ぼう〳〵たる頭髪と鬚髯、力に光る二つの眼、鼻は隆く、眉は秀で、赤銅色の顔には幾條かの深い皺が刻まれ、眉間にある一貼の大豆粒大の疣も、宛ら佛の尊像を見るが如くに異彩を放ってゐます。身長五尺六七寸もあらうか。その骨格の頑丈さ。―かうした諸貼によつても、既に凡夫は威圧されさうな感じがします。」

さらに記者は自身の病気を松蔵に言い当てられる。妻、長男、長女の病気についても言い当てられる。のみならず松蔵は妻の病気はたちどころに治せると記者に言い放った。あとで妻に長距離電話をかけると、その日まで続いていた出血がぴたりと止まったということが分かる。こうして記者はすっかり松蔵の力に魅せられたようである。記者が病気の主たる原因を訪ねると、松蔵はこう答えた。

「それは心臓だ。心臓の四室は生命の本源であつて、生命を造り出した二柱の男女の神様と、男女の親様の四つの魂に當てはまる。だから四魂の調和が欠けると、四室の調和が破れて、病気の原因になる。医者などはこの理屈が分からないから、病気を治せないことがあるのだ。」

二柱の男女の神はイザナギ・イザナミのことであろう。ここで言われている四魂は神道の一霊四魂説、すなわち直霊と荒魂・和魂・幸魂・奇魂の四魂の考えに基づいていると考えられる。ただ松蔵は独自の解釈もしている。四つの魂は頭上にあって生命をつかさどり、心臓を支配しているとしていて、さらに次のように述べた。

「四魂のうち、神の霊は穢れなく清浄なものであるが、親譲りの霊には穢れがついてゐる。その穢れた魂は穢れたところには一層近づき易い。それを引留めてくださるのが神の霊である。この善と悪との魂に仲違ひができても、そこに、よき仲裁者さへあるなら、仲直りができるであらう。俺はその仲裁者だ。神の番頭として、仲裁の役を仰せつかつてゐるのぢや」

ではどうすれば病気が治るのかと記者が質問すると、神の定めた人間道、すなわち忠・孝・敬神・崇祖の四つを正しく行うことだと答えた。また自分は神から力を授かっているので、どこが病気か分かるし、原因も分かるが、病気を治すのは神であり、先祖であり、本人自身の心であると述べた。病気治しは疑い深い人間に神の力を見せて手引きする方法であると述べ、神を敬い、人間道を反省しなければ、一時治ってもすぐ再発するとした。

記者は何人かの信者にも話を聞いている。記事の最後に、「科学文明の世界から、神代の神話でも聴くような神秘の世界に突入した記者の頭は、物質の世界を離れて夢の中を彷徨してゐるような気持ちです」と述べつつ、自分としては体験したことをありのままに記したとしている。



この記事への反響にはすさまじいものがあり、国内はもとより国外からも参拝者が訪れるようになった。一日に何十人あるいは、何百人も参拝することがあり、やがて毎日米を三俵ないし四俵炊いて、家族は応対に追われるようになったという。参拝者のなかには一日で帰る人もいたが、何週間、ときには一年ほど籠る人もいた。当時の国鉄鹿児島本線の長洲駅から松蔵の家までバスが運行されており、それは「神様行」と名づけられていた。

また松蔵は手紙や電報による依頼にも逐一対応していたので、全国さらには海外からも病気治しその他の依頼が寄せられた。教団本部にはその当時寄せられた手紙や電報の一部が残されている。総数でいくらになったかは正確には分からないが、教団関係者の話からすると、おそらく少なくとも数万件にのぼったと推定される。

## 二　松下松蔵の宗教体験

松蔵宛ての手紙類を分析する前に、彼がどのような経緯で、こうした活動をするようになったかを簡単に述べておきたい。松蔵は一九七三（明治六）年三月一〇日に松下恵七とチヨの長男として、熊本県玉名郡で生まれた。小さい頃から体があまり丈夫ではなく、教育らしい教育も受けていなかったという。ただ宗教的な雰囲気や話は好きであったようで、八歳の頃から好んで神社や寺院にでかけてゆき、そこでの講話や説教を聴いていたという。四〇歳半ばになっていた一九一九（大正八）年八月七日の夜に、突然の宗教体験があったとされている。その頃は毎日神前で祈るのを日課にしていたとされるが、いつものように神前にぬかづいて祈念祈願していると、すさまじい量の血を吐いてしまった。そのまま昏倒し死ぬかと思うほどの状態に陥ったようである。そのとき天津神からの啓示を受けたという。そこで示されたことはのちに四大道としてまとめられる。四大道とは、忠・孝・敬神・崇祖の四つが、人間の行うべき基本的な四つの道であると説く教えである。

この突然の体験を経た直後から松蔵は自分が特別な能力を得たと感じるようになった。具体的には、「神眼」「神耳」と表現されるような、いろいろな現象を見通す能力である。そして天津神との交流、死霊・生霊との交霊、動物霊などの排除といったわざができるよ

うになったという。そしてその得た力を人々に対する救済法として用いたのが「お手数（てかず）」である。彼は自分の手を訪れた依頼者の患部などに当てて痛みや病を癒そうとした。これによって病が癒えたという人が増え、松蔵は「祖神様（おやがみさま）」と呼ばれるようになったのである。

松蔵の得た境地は彼が述べたところによれば、次のようなものである。人間の根本は神であり、人間は神の分身であり分霊であるから、本来は純真清明なる霊の状態にある。ところが、その霊魂が穢れたため、不幸を招き、不運な出来事にあうことになる。霊魂を磨き、本来の純真清明なる心に帰るように努めなければならない。それが神に尽くすべき人の道である。

神道系新宗教においては、こうした人間観はよくみられる。人間は神の分霊であると考え、本来は罪や穢れはない存在であるとする。不幸や災いはたまたま生じた心の穢れによるものであるから、それを本来の姿に戻すことが本人の幸せであり、また神の願いでもあるとする。こうした考えは神道の伝統的な霊魂観、あるいは禊祓の考えと通じるところがある。天理教や生長の家の教えにも類似のものがみてとれる。

松蔵は日々の信仰の実践のあり方についても触れているが、そこでは親孝行がもっとも重要で、これが人間道の根本であると説いている。孝行の功徳は偉大であるということを、重ね重ね述べている。彼は自らの役割について、「松下松蔵は、宇宙の大気と人間の中間に在って、その両方の取次をする役目をして居る。」と言っている。この松蔵の自分に対する位置づけは、神社神道で「中執持（なかとりもち）」と呼ばれている役割に近いものであるし、金光教の取次という観念にも通じるところがある。また「人間が、幸福になるも、不幸になるも、本人の毎日の実行次第である。」とも言っている。

自分は特別な能力を備わったが、それを他の人の幸せのために活かすのだという自覚のもとに、自分が対処できることにも限界があるけれども、それでも救済を試みるのは自分の使命であると、固く信じていたように思われる。ただし幸福が得られるかどうかは、究極的には当人の日々の実行によるともしている。

松蔵の評判が広く知れ渡ったころに教団を訪問したり、手紙等を送ってきた人々の多くは、直ちに病気を治してくれる生神様として松蔵にすがろうとした。だが、松蔵自身は世直しという大きな目的を抱いていた。そこで社会的に影響力のある人たちに会って、自分の目指すところを伝えようと試みた。一九三三年には上京して四大道を説いたが、反応は鈍く、あまりうまくいかなかった。その後も



なんとか国の指導者層に接触を試み、平和への願いを伝えたりするが、むなしい結果に終わったようで、日本の将来への悲観的な見方を示すようになる。敗戦の少し前の四五年五月、ある信者に対し「いよいよ時が来た。日本はこの戦争に負ける。負けた後は、人間の心は益々乱れる。そして苦しむ。」と語ったという。

敗戦後、日本人の考え方、思想が乱れることを予見し憂えたが、実際の活動は、戦後もやはり病気治しが中心であった。信者たちは一貫して、彼の癒しの能力にすがろうとする人が大半を占めた。彼の説く、道徳観さらに天皇を中心におく国家観と、信者の大半が彼に求めていたこととの間にはいささかのずれがあったようである。一九四七年十一月十二日に、自宅で家族に囲まれ静かに死去した。

教団は松蔵の没後、松下松男、松下延明と継承された。松蔵の死から五年後の一九五二年、祖神道は宗教法人として認証されたが、その管長となったのは松蔵の長男の松男であった。公益財団法人国際宗教研究所の宗教情報リサーチセンターがオンラインで公開している教団データベースがあるが、その祖神道の項には、教団から回答があった「活動趣旨および目的」が記載されている。そこには次のように述べられている。[2]

「天津神様の摂理と啓示である四大道「忠孝敬神崇祖」を実践し、修養修業によって、自己の魂を磨き、神人合一（人間完成）をはかる。そして、絶対的幸福を獲得し、天津神様の御意志、すなわち、地上の平和と人類の幸福を実現することを目指している。」

松蔵のもとには、自分や家族の病気治し等を願う人が訪れただけでなく、その癒しの活動を自らも行おうとする人たちも出てきた。黒住教、天理教、金光教など幕末から明治期において教勢が伸びた近代新宗教の場合は、弟子層が教祖の教えを広めようと各地で布教活動を行い、それが組織の拡大につながったことが明らかにされてきている。これに比べると、祖神道の場合は、弟子層が形成されることで、その布教活動が松蔵没後の教団の展開に寄与するということはあまりなかったようである。松蔵の教えを受けた信者のうち、何人かが独自の教団を形成するという展開になった。なぜそうなったかについての考察は、資料が十分でないこともあってここでは行わないが、どのような分派的な教団が形成されたかについては概略を述べておく。[3]

吉岡太十郎（一八九八～一九七六）は『主婦之友』の記事で松下松蔵のことを知って、一九三三年頃から彼に師事するようになった。比較的初期の信者と言える。その後、三五年に当時神道教派の一つであった大社教の権大講義の資格を取得し、三四年には会社経営を行うかたわら大社教金沢分院長となった。当時は新しく宗教活動を行う場合に、神道系の教団であると、公認されていた十三派のいずれかに属して活動するのは、よくみられることであった。傘下にこうした教団を多く擁していたのは、神道本局、神道修成派、神習教、神道大成教、御嶽教などであるが、大社教もその一つである。祖神道も一時期大社教に関わりがあったようで、その関係で大社教の教師となった祖神道の信者もいた。[4] 吉岡もその一人と考えられる。吉岡は戦後しばらくして会社経営から離れ宗教活動に専念するようになり、四九年に金沢市に祖神道教団を設立した。

長橋靖彦（一八九五～一九八一）も同じく『主婦之友』の記事によって松蔵のことを知り、一九三一年に妻とともに当時住んでいた金沢から松蔵のもとを訪ねる。翌年から宗教活動に専念するようになり、やはり大社教に属して少教正の資格をとった。四〇年からは神道大教に所属する宗教結社金沢講社を設立した。所属する教派を変更するこうした転属も、戦前においては珍しいことではなかった。戦後一九五二年に、金沢市に四大道教を設立し、六一年に四大道と改称した。先に述べたとおり、四大道は松蔵の教えの中核にあったものであるから、名称からしても、その教えを継承するという意識があったとみなすことができる。

本城千代子（一九〇二～五七）も金沢市に住んでいたとき、松蔵のことを知り、松蔵のもとを訪ねる。病弱であったことが主な理由である。松蔵から「貴女の病は神様の御心である忠・孝・敬神・崇祖を悟らぬための神の障りである」と言われ、彼のもとで修行することとなる。一九三七年頃には自らも霊能力を示したとされる彼女のもとに信者が集まるようになった。戦後、道徳の必要を感じて財団法人真理実行会を設立し、四大道の実践を説いた。彼女の死後、一九六一年に真理実行会は宗教法人真理実行の教となった。

鉢呂福治（一八九九～一九六二）は京都に住んでいるとき、娘が幼くして急死するという体験をし、宗教的世界への関心を深める。霊感を得るようになったというが、その頃、松蔵のことを知り訪問する。一九四七年に松蔵が死去したのち、翌年京都で天恩教を設立した。四大道と同じ内容を四大綱領とし、また祖神道と同じように信者に「お手数」を施した。その他、藤本朝雄（一八九七生）は福岡に祖神道本庁を開いたことも知られている。



以上の教団は、緩やかな意味で祖神道系教団と呼ぶことができる。祖神道系教団を創立した人びとの存在は、後述の信者の地域分布や送られてきた手紙等の数の時期的変化について考察していく上で重要である。

## 三　信者はどこにどう広まったか

『主婦之友』の記事によって松蔵の存在が全国的に知られ、多くの信者が教団本部を訪れるようになった頃には、また各地から郵送や電信によって信者から多くの依頼がなされるようになった。郵便物の中には宛先が「長洲町　長洲生神様」としか記されていないものもあるが、それだけで届いていたことが分かる。祖神道の本部には、押入れには山と積まれた信者たちからの依頼やお礼の手紙・葉書、電報の束が残っている。松蔵はだれかれの差別なく、訪れる人に救済を試みたという。伝染病の患者でも意に介さず病気の治癒のためにお手数をした。松蔵は自分の思いを断片的に信者たちに伝えていたようである。多くの言葉を費やすよりも実行が大事であるというのが彼の信念であった。こうしたことが広く知られ、各地から郵便等で多くの依頼が来たと考えられる。

もっとも、これらをすべて信者からのものと見なすべきかどうかという疑問は生じるが、宛先にはたいてい「祖神様」などと記されているので、本稿では一応信者として扱っていくことにする。

いつ頃からそうしたものが増えたのか、どのような地域が多いか、どんな内容であるかを調べるため、教団本部に保管されていた封書・葉書・電報のうち約一万四千点ほどを一時借用して閲覧した。消印や差出人の住所判読ができないものや、ボロボロになっていて、閲覧すらできないものも少なくなかった。判読可能と思われるものの中から、最終的に本稿での分析の対象としたのは、一三、三一二点である。ほぼ十年にわたり継続的に大学院生の協力を得ての作業には、かなりの労力と時間とを要したが、國學院大學日本文化研究所のプロジェクトに組み込んだことにより、長期の研究を実施することができた。[5]

一三、三一二点の内訳は、封書七、六三〇点（五七・三％）、葉書一、三三九点（一〇・一％）、そして電報四、三四三点（三二・六％）である。信者の住んでいる住所は封書等に明確に記されていればそれに依拠し、記されていない場合は、消印にある局名で住んでいる地

域を推定した。電報はカタカナで記されている発信局で地域を推定した。しかしカタカナ表記では複数の候補が考えられ、当時の局名を特定できないものが一部あった。投函あるいは発信された日時は、封書と葉書は消印で投函の日時としたが、消印が判読できず、信者が記載した日時を参考にしたものもある。ただし後者はごく一部である。電報は受付の消印があるので、これで日時としたが、これも一部判読できないものがあった。

本稿は内容の分析より、信者の地域的広がりとその時間的展開をマクロに把握するのが主目的であるので、封書・葉書の投函地や電報の発信局（以下、「発信地」とまとめて表記する）、及び投函や発信がなされた年月日（以下「発信時」とまとめて表記する）のいずれも不明なものは、集計対象から省いた。大半は発信地と発信時の双方を確認できるが、一部は一方が不明であるので、集計の総計は発信地別と発信時別とでは異なる数となる。

手紙はときに長文のものもあるが、便箋で一、二枚のものが圧倒的に多い。電報はわずかな情報しか読み取れない。しかしいずれの手段で送られてきたものに対しても、松蔵と中核的信者が一つ一つ丁寧に対処したことがうかがえる。封書の一部にはその願いが叶うとか無理であるといった趣旨の松蔵の回答を補佐していた信者が短くメモ書きしたものがある。

### （1）時期別に見た展開の様相

まず発信時についてであるが、これを集計したものを年別に表1に示した。年月が分かるものは一一、二五八点であり、内訳は封書が五、九五五点（五二・九％）、葉書が一、〇八一点（九・六％）、電報が四、二二二点（三七・五％）である。表に示した年ごとの変化が分かりやすいようにしたのがグラフ1である。

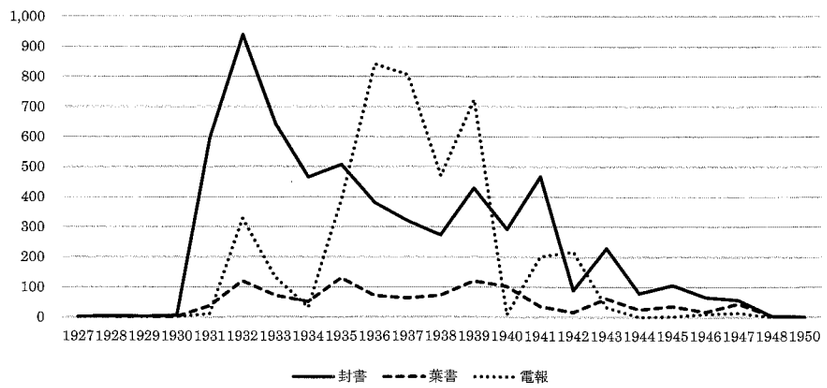
これで明らかなように、発信数は一九三一年から急増している。一九二七年から三〇年までは、まだ九州の地方紙に紹介されていた段階で、さほど発信の数は多くない。先に述べたように、『主婦之友』に記者による手記が掲載されたのは三一年の十一月号だが、実際には十月に発売になったと考えられる。その発売直後から一挙に依頼が押し寄せたと考えられることができる。三一年の時点で六四五件にのぼり、翌三二年が一、三八七件に達し、これがピークである。全体の点数を月まで細かく見て比較したのが表2である。



表1　年別の数（種別）

| 年 | 種別 | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 封書 | | 葉書 | | 電報 | | |
| 1927 | 1 | 100.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 1 |
| 1928 | 4 | 100.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 4 |
| 1929 | 2 | 50.0 | 2 | 50.0 | 0 | 0.0 | 4 |
| 1930 | 5 | 83.3 | 1 | 16.7 | 0 | 0.0 | 6 |
| 1931 | 597 | 92.6 | 37 | 5.7 | 11 | 1.7 | 645 |
| 1932 | 939 | 67.7 | 120 | 8.7 | 328 | 23.6 | 1,387 |
| 1933 | 642 | 75.9 | 72 | 8.5 | 132 | 15.6 | 846 |
| 1934 | 465 | 84.9 | 51 | 9.3 | 32 | 5.8 | 548 |
| 1935 | 507 | 49.3 | 130 | 12.6 | 392 | 38.1 | 1,029 |
| 1936 | 381 | 29.4 | 71 | 5.5 | 842 | 65.1 | 1,294 |
| 1937 | 320 | 26.9 | 63 | 5.3 | 806 | 67.8 | 1,189 |
| 1938 | 273 | 33.5 | 72 | 8.8 | 470 | 57.7 | 815 |
| 1939 | 429 | 33.7 | 120 | 9.4 | 724 | 56.9 | 1,273 |
| 1940 | 292 | 72.6 | 102 | 25.4 | 8 | 2.0 | 402 |
| 1941 | 467 | 66.3 | 36 | 5.1 | 201 | 28.6 | 704 |
| 1942 | 89 | 27.6 | 16 | 5.0 | 217 | 67.4 | 322 |
| 1943 | 229 | 70.7 | 62 | 19.1 | 33 | 10.2 | 324 |
| 1944 | 79 | 76.0 | 25 | 24.0 | 0 | 0.0 | 104 |
| 1945 | 106 | 73.6 | 36 | 25.0 | 2 | 1.4 | 144 |
| 1946 | 66 | 71.0 | 17 | 18.3 | 10 | 10.8 | 93 |
| 1947 | 57 | 49.1 | 45 | 38.8 | 14 | 12.1 | 116 |
| 1948 | 4 | 57.1 | 3 | 42.9 | 0 | 0.0 | 7 |
| 1950 | 1 | 100.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 1 |
| 合計 | 5,955 | 52.9 | 1,081 | 9.6 | 4,222 | 37.5 | 11,258 |
| 不明 | 1,675 | 81.5 | 258 | 12.6 | 121 | 5.9 | 2,054 |

グラフ1　年次別件数（種別）



一九三一年九月の分は三点であるが、十月が九七点、十一月が四〇四点、そして十二月が一二八点と推移している。おそらく十月の時点で多くの地域で『主婦之友』が販売されたと考えられる。三一年の十一月の四〇四点というのは月別にみると、抜きん出て多い。次いで多いのは三九年三月の一九三点、三二年四月の一八九点である。雑誌発売直後の反響が極めて大きかったということが、グラフによって明確に分かる。

『主婦之友』は一九一七年に創刊されているが、松蔵についての記事が紹介された当時は、女性向けの雑誌としては代表的なものになっており、多くの読者がいた。一九三〇年代には発行部数が百万部を超えていたとされているので、現在のテレビに十分匹敵するほどの影響力があったと考えられる。この記事以前に松蔵を「神人」として紹介する書籍も刊行されていたのだが、やはり女性を対象とした雑誌の影響はそれとは比較にならない影響力をもっていたことが分かる。

封書・葉書・電報の種別（以下「種別」と表記する）に見ると、グラフ1で見て取れるように、封書が三一年から三三年にかけて多く、その後、緩やかに減少傾向になっている。葉書は三つのうちではもっとも数が少なく、また変化も比較的小さい。封書の数の推移と葉書のそれとは、ある程度相関していることが分かる。

電報は封書・葉書の年別の推移と異なったパターンを示している。三六年から三九年に目立って多い。ピークは一九三六年であり、八四二点に上る。翌三七年も八〇六点と多く、この二年間だけで全体の約四割を占めている。電報が途中から増える理由はいくつか考えられるが、地域的な問題と信者となってから繰り返し依頼をするような人が増えたことなどは、重要な要因に含めるべきであろう。地域的な問題とは、次に述べるように電報の占める割合が多い地域に偏りがみられることである。朝鮮半島の主要都市や中国の大連なども含まれる。また石川県は約半数ほどが電報であるが、石川県の金沢市は祖神道の展開にとっては、前述の祖神道系教団の分布からも推測されるように、弟子と呼ぶに近いような人物が複数存在した地域である。金沢市や周辺の市町村から繰り返し依頼する人が生じることと何らかの関係があったという推測も生じる。これについては後述する。



表2　月別の数

| 年 | 月別の点数 | | | | | | | | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 不明 | |
| 1927 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 1928 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 |
| 1929 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 |
| 1930 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 6 |
| 1931 | 1 | 1 | 1 | 3 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 | 97 | 404 | 128 | 5 | 645 |
| 1932 | 154 | 191 | 95 | 189 | 82 | 107 | 136 | 44 | 40 | 141 | 119 | 80 | 7 | 1,385 |
| 1933 | 72 | 142 | 118 | 101 | 39 | 38 | 10 | 65 | 59 | 47 | 71 | 70 | 12 | 844 |
| 1934 | 25 | 54 | 85 | 68 | 44 | 40 | 55 | 32 | 28 | 16 | 64 | 31 | 6 | 548 |
| 1935 | 76 | 74 | 137 | 98 | 83 | 71 | 124 | 118 | 89 | 61 | 32 | 51 | 14 | 1028 |
| 1936 | 51 | 55 | 87 | 134 | 121 | 131 | 138 | 139 | 113 | 98 | 122 | 102 | 2 | 1,293 |
| 1937 | 121 | 142 | 119 | 111 | 124 | 79 | 75 | 47 | 103 | 87 | 85 | 87 | 9 | 1,189 |
| 1938 | 103 | 108 | 64 | 31 | 14 | 15 | 13 | 65 | 75 | 129 | 66 | 118 | 11 | 812 |
| 1939 | 128 | 164 | 193 | 27 | 45 | 23 | 137 | 153 | 93 | 119 | 98 | 80 | 12 | 1,272 |
| 1940 | 4 | 25 | 19 | 10 | 17 | 26 | 1 | 81 | 41 | 87 | 63 | 20 | 8 | 402 |
| 1941 | 30 | 68 | 97 | 39 | 32 | 52 | 100 | 9 | 38 | 56 | 66 | 107 | 10 | 704 |
| 1942 | 49 | 33 | 77 | 46 | 3 | 2 | 3 | 58 | 12 | 3 | 20 | 1 | 14 | 321 |
| 1943 | 2 | 63 | 71 | 3 | 7 | 89 | 5 | 37 | 11 | 15 | 3 | 6 | 11 | 323 |
| 1944 | 1 | 0 | 0 | 1 | 5 | 15 | 1 | 0 | 9 | 20 | 11 | 39 | 2 | 104 |
| 1945 | 22 | 3 | 17 | 31 | 7 | 13 | 38 | 0 | 1 | 3 | 1 | 3 | 5 | 144 |
| 1946 | 34 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 10 | 34 | 9 | 0 | 2 | 93 |
| 1947 | 1 | 12 | 50 | 39 | 0 | 4 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 115 |
| 1948 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 | 0 | 7 |
| 1950 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 不明 | 73 | 119 | 194 | 147 | 68 | 149 | 148 | 93 | 79 | 182 | 159 | 141 | 465 | 2,017 |
| 合計 | 948 | 1,256 | 1,428 | 1,080 | 691 | 856 | 992 | 944 | 804 | 1,196 | 1,398 | 1,069 | 598 | 13,262 |

## （2）地域別に見た展開の様相

発信地が分かるものは一二、七八四点で、内訳は封書七、五七四点（五九・二％）、葉書一、二九〇点（一〇・一％）、電報三、九二〇点（三〇・七％）である。発信地は日本のすべての都道府県にわたるのみならず、当時日本統治下にあった朝鮮半島、台湾、樺太、その他の地域にまで広がっている。日本人が多く住んでいた満州の他、大連など中国のいくつかの地域や、香港、ベトナム、さらには米国、ブラジルなどからのものもある。

四七都道府県から送られてきた手紙、葉書、電報を、種別に発信地をまとめたものがグラフ2である。東京がもっとも多く一、八四〇点、次いで石川県一、一七七点、熊本県九三四点、福岡県九〇二点、広島県六六六点である。ただし国内の場合、都道府県ごとの人口が大きく異なるので、単純に絶対数だけでは信者の分布を考える上では不十分である。そこで一九三五年の国勢調査による各都道府県の人口に対する比率を見てみた。人口は毎年変わるが、一九三〇年代から四〇年代前半を対象にした調査であるので、便宜上一九三五年の国勢調査による人口を用いた。三五年の人口は七千万人近く（六九、二五四千人）であるが、この年の都道府県別の人口で都道府県別の点数を割り、百万人当たりの人数を示してあるのが表3である。

絶対数では東京がもっとも多かったが、人口比率で比べてみると、突出しているのは石川県である。百万人当たり一、五三三通になる。次いで熊本県の六七三通、山口県の四一六通、大分県の四〇八通、広島県の三六九通である。逆にもっとも少ないのが沖縄県の一二人である。関東北部の県や東北の日本海側の県が少ない傾向にある。おおよその傾向を分かりやすくするために地図に五段階に分けて示した。

石川県の突出した多さは、石川県に戦後祖神道系教団を形成することになった人が複数いたことが関係しているのではないかと推測される。吉岡太十郎、長橋靖彦、本城千代子の三人はいずれも金沢市で講社を結成するなどの活動を始めていた。それが一種の地方支部のような役割を果たして、多くの人々が教祖松下松蔵に手紙類や電報を送った可能性が高い。

日本統治下にあった地域からのものの中では、とくに朝鮮半島からのものが目立ち、一、二〇〇点にのぼる。ピョンヤン（当時は平壌）からのものは二四一点で、ソウル（同じく京城）からのものは二三六点である。またピョンヤンに近い「ケンニホ」からの電報がかな



グラフ２－１　地域別点数

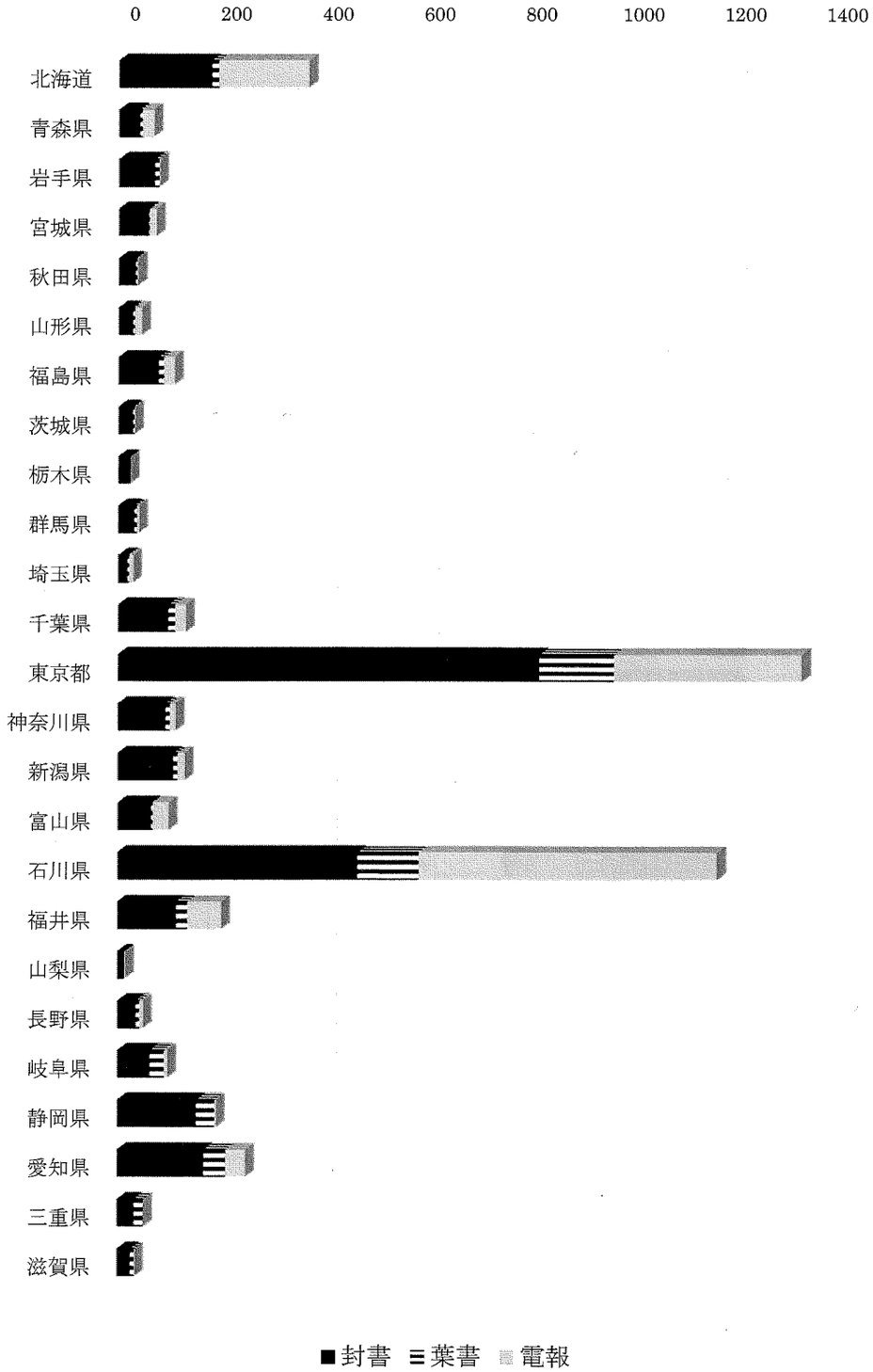
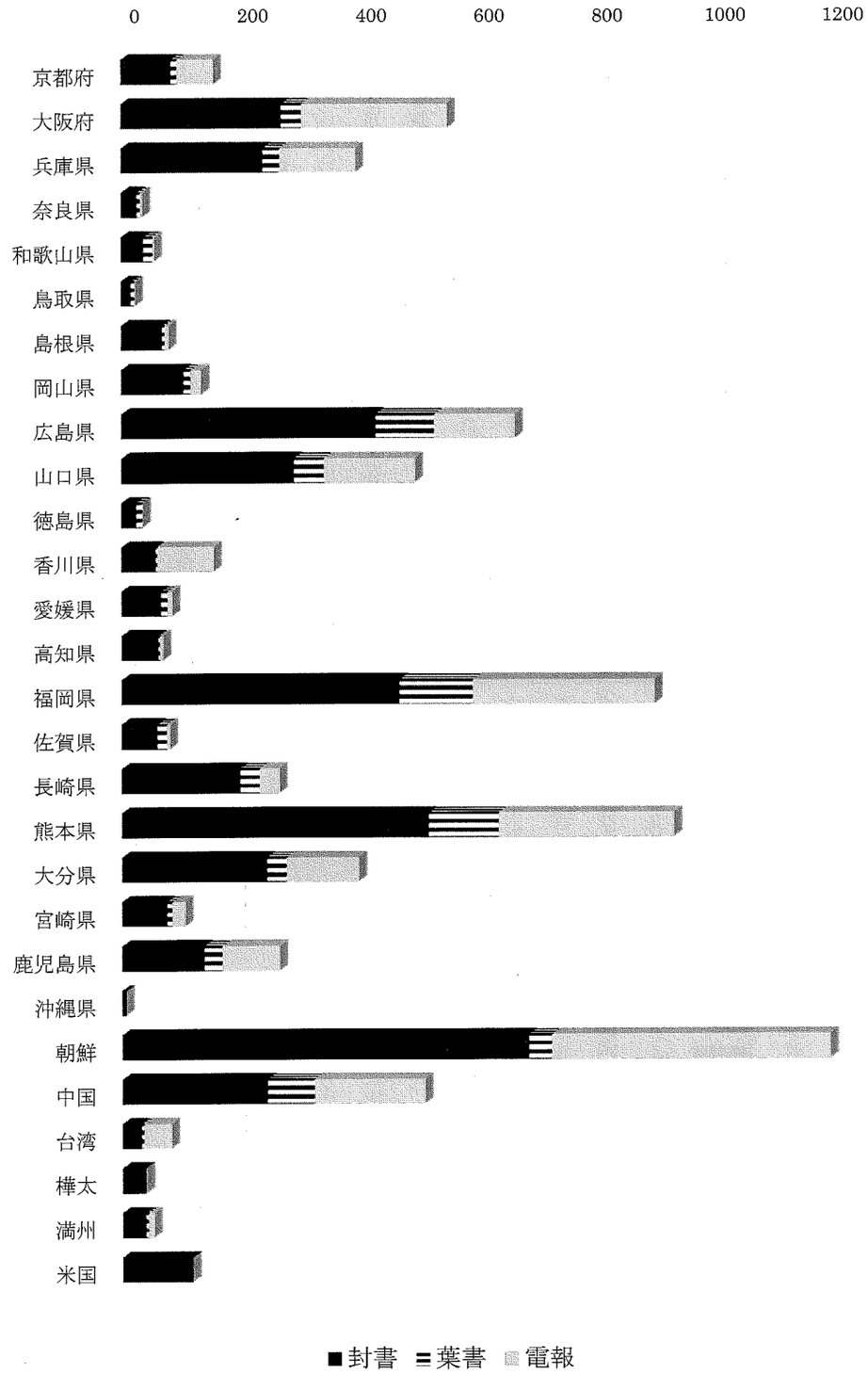


表３

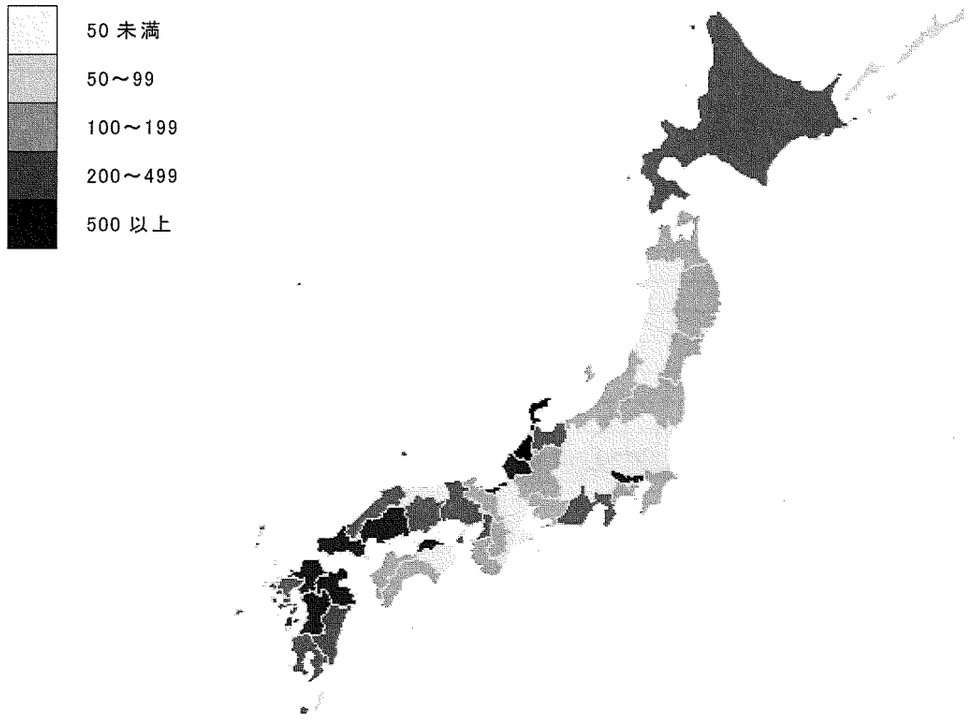
| 地域別 | | （単位：千人） | 百万人当たり |
|---|---|---|---|
| 北海道 | 374 | 3,068 | 122 |
| 青森県 | 69 | 967 | 71 |
| 岩手県 | 81 | 1,046 | 77 |
| 宮城県 | 75 | 1,235 | 61 |
| 秋田県 | 39 | 1,038 | 38 |
| 山形県 | 46 | 1,117 | 41 |
| 福島県 | 111 | 1,582 | 70 |
| 茨城県 | 33 | 1,549 | 21 |
| 栃木県 | 24 | 1,195 | 20 |
| 群馬県 | 41 | 1,242 | 33 |
| 埼玉県 | 30 | 1,529 | 20 |
| 千葉県 | 134 | 1,546 | 87 |
| 東京都 | 1344 | 6,370 | 211 |
| 神奈川県 | 114 | 1,840 | 62 |
| 新潟県 | 132 | 1,996 | 66 |
| 富山県 | 101 | 799 | 126 |
| 石川県 | 1177 | 768 | 1533 |
| 福井県 | 205 | 647 | 317 |
| 山梨県 | 15 | 647 | 23 |
| 長野県 | 51 | 1,714 | 30 |
| 岐阜県 | 99 | 1,226 | 81 |
| 静岡県 | 195 | 1,940 | 101 |
| 愛知県 | 252 | 2,863 | 88 |
| 三重県 | 52 | 1,175 | 44 |
| 滋賀県 | 35 | 711 | 49 |
| 京都府 | 157 | 1,703 | 92 |
| 大阪府 | 551 | 4,297 | 128 |
| 兵庫県 | 396 | 2,923 | 135 |
| 奈良県 | 36 | 620 | 58 |
| 和歌山県 | 56 | 864 | 65 |
| 鳥取県 | 24 | 490 | 49 |
| 島根県 | 80 | 747 | 107 |
| 岡山県 | 136 | 1,333 | 102 |
| 広島県 | 666 | 1,805 | 369 |
| 山口県 | 496 | 1,191 | 416 |
| 徳島県 | 36 | 729 | 49 |
| 香川県 | 156 | 749 | 208 |
| 愛媛県 | 86 | 1,165 | 74 |
| 高知県 | 70 | 715 | 98 |
| 福岡県 | 902 | 2,756 | 327 |
| 佐賀県 | 82 | 686 | 120 |
| 長崎県 | 266 | 1,297 | 205 |
| 熊本県 | 934 | 1,387 | 673 |
| 大分県 | 400 | 980 | 408 |
| 宮崎県 | 107 | 824 | 130 |
| 鹿児島県 | 267 | 1,591 | 168 |
| 沖縄県 | 7 | 592 | 12 |



グラフ２－２　地域別点数



地図　都道府県別　人口比で換算した百万人当たりの点数






りあり、六三点になる。ケンニホは日本統治時代の地名で、現在は使われていない地名である。「兼二浦」という漢字表記をされていた。現在は北朝鮮のソンニム（松林）市に含まれる地域である。ここには一九一七年に三菱製鉄が建設した日本製鐵株式會社があった。ケンニ（兼二）は日本人軍人の名前からとられたという。それにしても、これだけの数が兼二浦から送られてきた背景は興味が抱かれる。

米国からのものは大半がハワイからである。米国からの一一九点のうち、ハワイからのものはその大半の一一六点にのぼる。ハワイには多くの日系人が住んでいたが、彼らからの郵便物であり、多くが封書である。電報によるものはない。オアフ島のホノルルからのものがもっとも多いが、その他、日系人が多く住んでいたハワイ島のヒロやマウイ島からのものも数通ある。やはりほとんどが病気治癒に関するものであり、「お手数」をお願いするという文面がしばしば見受けられるので、ハワイでも「お手数」は広く知られていたと考えられる。一九三二年一月に送られてきた手紙に、『主婦之友』で松蔵のことを知った旨を記したものがあるので、記事のことはハワイでも発売後ほどなく知られていたことが分かる。ハワイの移民は広島県、山口県、沖縄県に次いで熊本県出身者が多い。戦前に熊本県出身者が中心になって建てた加藤神社がオアフ島ホノルルにあった。[6] ただ祖神道の信者に熊本県の出身者が多かったかどうかは不明である。米国や南米の国からは郵便のみだが、電報は当時は国内の他、朝鮮半島、台湾、樺太、関東庁、南洋庁の管轄下にあった地域からは国内に送ることができたので、朝鮮半島からも多くの電報が来ている。

香港とマカオからのものは一五点、パラオからのものは六点で、ベトナム、カナダ、インドネシア、パナマ、フィリピン、ペルーからのものもそれぞれ一～二点ある。名前から判断していずれも日本人からである。こうしてみると、実に広範の地域にわたっていることが分かり、松蔵の評判が短期間に国外にまで行きわたったことが分かる。

国内の電報の占める割合が、都道府県別にみるとかなり異なるのが注目される。封書は葉書より丁寧な方式と考えられるが、封書と電報は少し性格が異なるところがある。電報は緊急性が高いと考えられる。ただ短い文章しか送れないので、すでに信者となっていた人からのものが多いと推測される。むろん封書や葉書で繰り返し送っていた信者もいることが分かったので、どの方法で送られてきたかで、松蔵との距離の度合いを推測するのは困難である。

電報の占める割合が高いのは、現在の国内では香川県の六〇・九％がもっとも高く、次いで石川県の四九・七％、北海道の四七・三％、

大阪府の四四・六％、鹿児島県の三六・七％となる。香川県は例外であるが、それ以外の四道府県は、郵便、電報が合計で二〇〇点以上で多い部類に属する。信者が多いことと電報が多いことには緩やかな相関が見いだされるが、これは繰り返し依頼をする人の多さに関係している可能性がある。電報では発信者の詳細な住所が分からないわけであるから、たいていはすでに信者になっている人が送ったのではないかと考えられるからである。

### (3) 広がりのルートの推測

こうしたマクロな分析では、信者がおおよそどの地域にどの時点で増加したのかの傾向は分かるが、どのようなルートでそれが広がったかまでの経路は分からない。ただ『主婦之友』への掲載は一時期のことであるので、その情報によって信者になった人から、その人の親戚、友人、職場の同僚などに情報が広まることで、より広い地域と長い時間にわたって信者の形成が続いたと考えるのが自然である。これは他の新宗教の場合において得られた知見であり、日本の近代新宗教の広まりにおいては、見知らぬ人への勧誘の占める割合は一般的にさほど大きくなく、多くはすでに親しい関係にある人からの情報が占める割合が高い。祖神道の場合もそうした情報ルートが大きな役割を占めたと考えるのが妥当である。

また封書や葉書の差出人を調べると、同一人物が複数回郵送している例も多いことが分かる。なかにはきわめて頻繁に送る人物もいる。同姓同名の場合もあると考えられるので、封書と葉書の分から地域と筆跡から明らかに同一人物と同定できるものを数えると、二十回以上送っているが十二人いる。その性別と都道府県名を表4に示した。もっとも多いのは五八回も送った男性で発信地は福井県である。十二人のうち石川県の信者が三人含まれている。また大連から二五回送った信者もいる。これは今回の閲覧対象としたものだけから算出した回数であるので、今回の分析対象にできなかったものを含めると、いずれも実際にはもっと回数が多かった可能性がある。



表4　20通以上の送付者

| 地域 | 性別 | 点数 |
|---|---|---|
| 福井県 | 男性 | 58 |
| 石川県 | 男性 | 50 |
| 福岡県 | 女性 | 46 |
| 広島県 | 女性 | 35 |
| 石川県 | 男性 | 30 |
| 東京都 | 男性 | 29 |
| 兵庫県 | 女性 | 27 |
| 福島県 | 男性 | 27 |
| 大連 | 男性 | 25 |
| 石川県 | 男性 | 25 |
| 兵庫県 | 男性 | 24 |
| 福岡県 | 男性 | 22 |

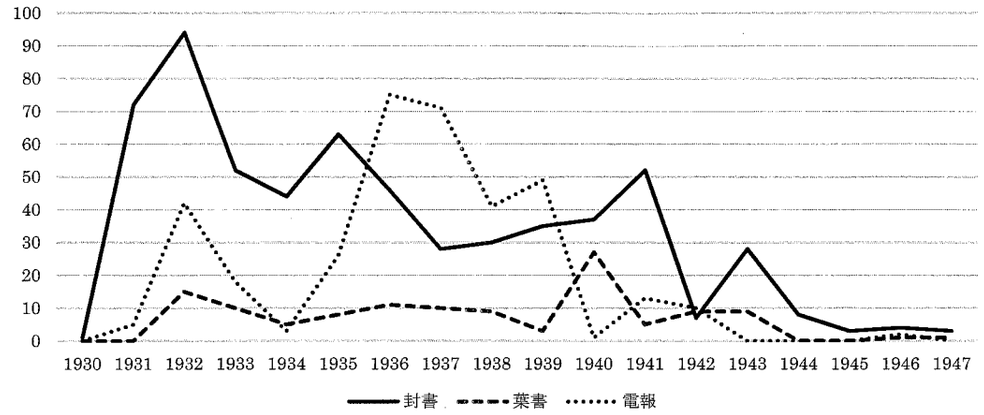
ちなみにもっとも郵便で送った回数が多い信者は福井県の男性である。内訳は手紙が四三通、葉書が一五通の合計五八通に上る。送った年は一九三五年から四七年までにわたる。三五年に一回、三六年に二通、三七年に七通、三八年に六通、三九年に一一通、四〇年に八通、四一年に六通、四三年に三通、四四年に三通、四五年から四七年まで各一通、そして年が不明のものが八通である。松蔵の死去の年まで定期的に送っていることが読み取れる。

二番目に多いのは石川県の男性で手紙が二八通、葉書が二二通の合計五〇通である。この男性の場合、少し年月に偏りがあり、一九三六年に二通、三八年に一通、三九年に四二通、そして残り一通が四四年である。三九年の場合も一月から三月までで二四通に達しており、一月前半などはほぼ毎日送ってきている。よほど深刻な事情があったのかもしれない。

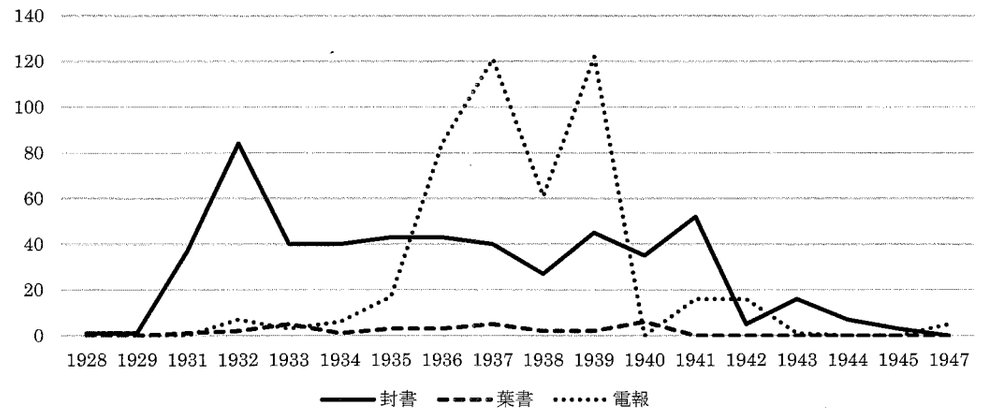
三番目に多いのは福岡市の女性で、封書一七通、葉書三〇通の合計四七通である。一九三四年、三五年が各一通、三八年が三通、三九年が二通、四〇年が一通、四一年が六通、四三年が二通、四四年が三通、四七年が九通、年不明が一九通である。松蔵が死去する四七年に目だって多いのが特徴であるが、最後まで願いは病気の治癒である。

数多く送った信者の場合、多少発信時にはバラツキがあるが、おおむね松蔵の晩年に至るまで、さまざまな依頼、感謝、その他について封書や葉書を送り続けていることが分かる。

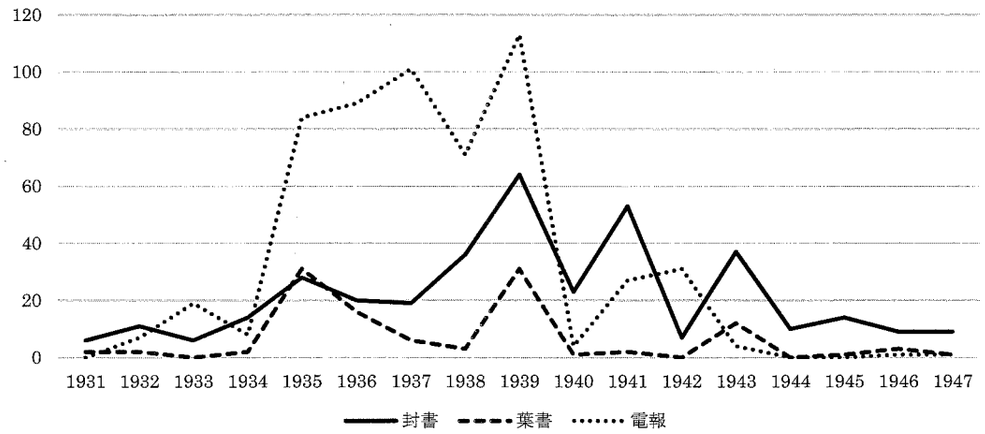
グラフ３　東京都（発信年、種別）




グラフ４　朝鮮（年別、種別）

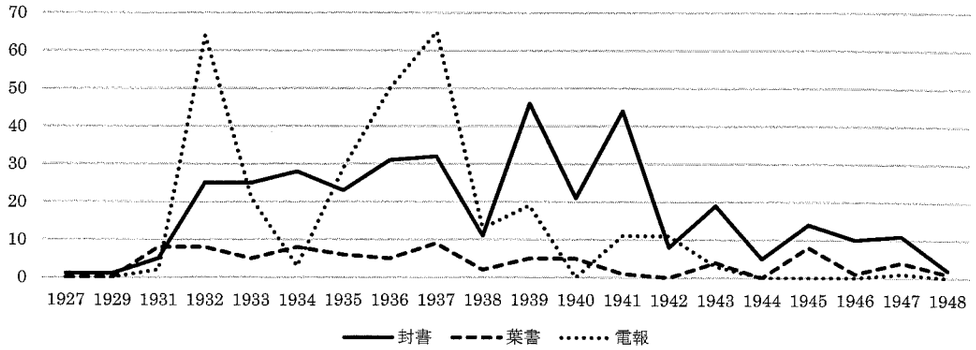



グラフ５　石川県（年別、種別）

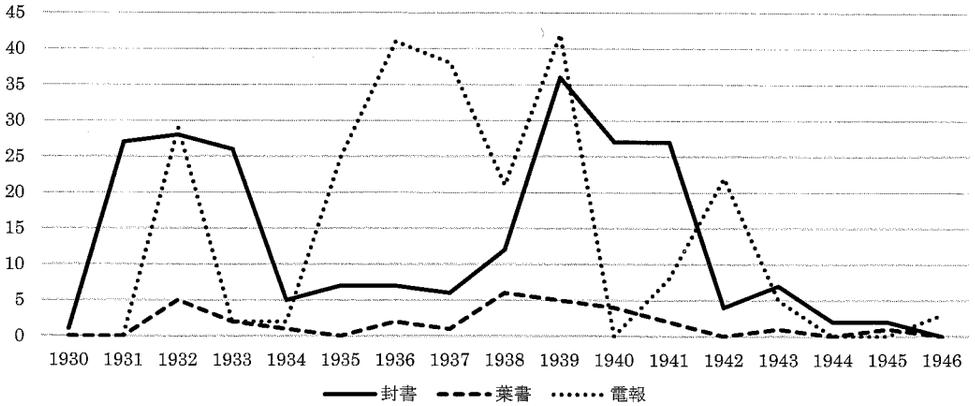




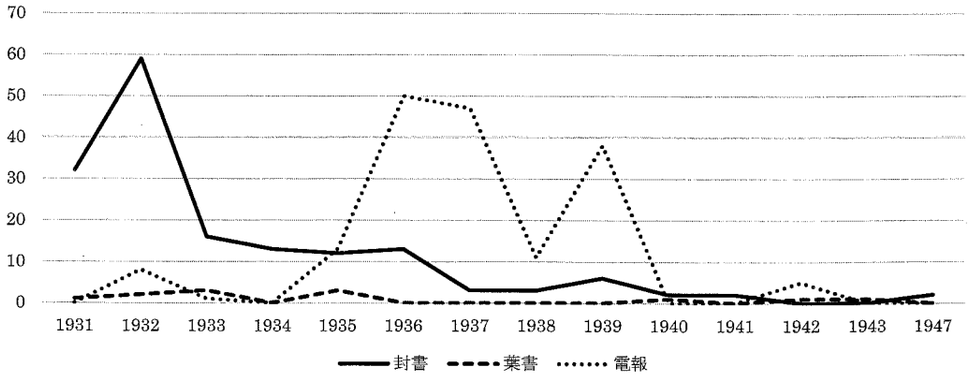

グラフ６　熊本県（年別、種別）




グラフ７　大阪（年別、種別）




グラフ８　北海道（年別、種別）



電報はすでに信者になっている人が繰り返し出す場合が多いのではないかという推測をしたが、全体の数が多い都道府県において、年別に電報の占める割合がどう変わるかを少し見てみる。分かりやすいようにグラフにした。郵便、電報の総計が多い東京都、朝鮮半島、石川県、熊本県、それにやや特徴的な変化となった大阪府と北海道の例を示す。（グラフ3～8参照）

東京都の場合は電報が一九三二年に四〇点になり、いったん減少してから三六年に急増している。四〇年には減少している。石川県は三五年に一挙に八〇点以上になっている。三九年まで七〇点以上という高い数値を示している。熊本県は三二年に六〇点を超えているが、いったん減少し、三七年にふたたび六〇点を超える。以後は減少している。大阪府も三二年に小さなピークがあり、三〇年代後半が持続的に比較的高い数値である。北海道は三六年から翌年にかけてのものが比較的多く四〇点以上である。封書がこの時期に減っているのと対照的である。朝鮮半島であると三七年から三九年にかけての時期が高い数値である。すでに三二年の時点で八〇点を超える封書があるので、教祖についての情報は一定程度朝鮮半島にも伝わっていたと考えられる。

封書の増減と電報の増減のパターンが比較的似ているのは石川県である。封書から少しずれて増えているのは東京都と北海道、それに朝鮮半島である。封書より早くピークが来ているのは熊本県である。大阪府は封書とやや連動するが、ピークは封書よりやや早い。こうした変化がどうして生じるのかをマクロな分析からだけで論じるのは困難なところがあるが、電報の場合は、まさにほぼ一つのことに対する依頼なり質問なりである。緊急性が比較的高いか、手軽に依頼したか、あるいはその両方を含むかである。これがもし松蔵との親密な関わりを反映していると仮定すると、熊本県や大阪府には比較的初期にそうした人々が増え、北海道は少しそれが遅れたという解釈も可能である。また石川県の例に鑑みると、東京都や朝鮮半島でも松蔵の教えをそれぞれの地域で広める人が現れたことを反映している可能性もある。こうした点については内容面の分析を進めた上で別稿で検討してみたい。

## むすび

一三、三一二点の郵便物、電報をマクロに分析して、祖神道の信者たちの時間的展開と居住地域の広がりを中心的に考察してきたが、



ここで分析の対象とした信者の中には郵便物や電報を繰り返し送ってきた人もいるので、信者数としては数千人程度になると推定される。これ以外に実際に教団本部を訪れた人も数多いが、訪問した信者の数と郵便物や電報を送った信者の数はある程度の相関性があるだろうと仮定すると、松下松蔵の影響力はとりわけ一九三〇年代にピークを形成したと考えられる。戦争が始まったことで、信者側の生活にも大きな変化が生じ、それが教祖への依頼の頻度やその内容等にも影響を及ぼしたことが推測される。これもまた内容の分析によって確かめるべき点と考えている。

手紙等の文面にはたどたどしい内容やほとんど平仮名のものもあるが、きわめて達筆で、しっかりした内容のものもある。非常に幅広い社会階層の人々が信者であったことが推測される。軍関係者も相当数いたようである。「軍事閲覧」の印が押された郵便もある。病気の治癒を願うものが圧倒的に多いものの、子どもの就職について尋ねたり、生き方について尋ねたものもある。ハワイからのものだと、子どもが外国人と結婚したがっているがどうしたらいいかというような相談もある。戦時中のものには勝利祈願をして欲しいという依頼もある。

送られたものの内容の大半は病気治癒の願いであるのは、『主婦之友』の紹介内容からして、そうなることは当然と言える。近代新宗教の教祖においては、病気治しが教祖の特別な力なり役割なりが認知される上で大きな意味をもつのが通例であるので、それを裏付ける資料ということにもなる。今回はマクロな分析にとどめたが、封書などに記された内容を詳細に検討すれば、病気治癒を教祖に求める割合がどの程度の割合にのぼるかを議論する上でも貴重な事例になりうる。

『主婦之友』の発売直後から信者が急激に増加したことは、これまでの研究や紹介等によってすでに知られていたことであったが、それがどの程度のものであったかを量的に明らかにできた。また信者の地理的広がりについては予想していた以上に多くの地域に信者が存在していたことが明らかにされた。また年度別と地域別をクロスさせることで、繰り返し依頼する信者の地域や時期の特徴に関して、多少の見通しが得られ、松蔵一人だけでなく、彼に帰依した信者の中に、さらにその教えを広げようとした人物の存在がどの地域にいたのかを考える際の参考にできる。

当時の全国的雑誌が情報の広がりにもっていた役割の大きさが量的に確認できた。また一度の掲載がこれほどまでに広い地域にわた

る信者を生み、十年以上にわたる手紙等による依頼などが継続したことは、松蔵によって癒されたと感じた人々が、それを他の人に伝えていったからであると考えられる。松蔵の宗教者としての活動が、多くの人に帰依の心を生じさせるものでなければ、そうした展開はありえないので、松蔵をまさに「祖神様」として頼るべき存在とした信者が短期間に相当数にのぼったということが、本稿の分析により明らかにされた。しかし松蔵の活動はそれ以前から同様になされていたわけであるから、近代新宗教にとって情報メディアの果たす役割は、この時期には非常に大きかったことも同時に確認できたことになる。

新宗教のなかでも近代新宗教は、日本の伝統的な宗教（神道、仏教、修験道）と深い関わりをもって形成され、教義面や実践面にも具体的にそれが見て取れるタイプのものである。[7] 祖神道も神道的な伝統を踏まえていたことはその教えから明らかであり、四大道として表明された教えは、儒教的要素を含みつつ、近代日本で説かれていた倫理道徳観と重なるものであった。お手数という独特の実践法があったにしても、典型的な近代新宗教と位置づけられる。神道的伝統との重なりが大きく、かつ神の願いに沿った心を持たせることを最終的目標としながら、手段として多くの人びとからの病気治しの依頼に応えるというやり方は、黒住教、天理教、金光教など、それ以前の神道系の近代新宗教と重なるところが多い。短期間に広い地域に信者を得たことは、情報メディアの影響が非常に大きかったことは間違いないにしても、それを可能にする潜在的な要素とそれが雑誌メディアの介在という偶然の条件によって、それがどのような展開の様相をもたらしたかを考察したのが本稿ということになる。

## 注

1 祖神道の教えについて分析したものとして、対馬路人「松下祖神道における生命の系譜論」（『日本仏教』53、名著出版、一九八一年）があるが、松下松蔵についての研究は、新宗教研究の中でもきわめて少ない部類に属する。なお、教団が刊行した教祖関連の書籍として、松下松蔵の言行を記した松下延明編『神書』（祖神道出版部、一九七七年）、また教えを分かりやすく解説した松下延明『永遠の生命』（祖神道出版部、一九七八年）と同『人の道』（同、一九八七年）がある。『主婦之友』の記事以前に松下松蔵を紹介したものとして、沢井元善『神霊界の大偉人生神松下松蔵氏』（九州毎日新聞社、一九二五年）と同『神人松下先生』（一九二八年）がある。

2 宗教情報リサーチセンターの教団データベースは左記のURLからアクセスできる。
http://www.rirc.or.jp/

3 祖神道の分派的教団の概要については、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』（弘文堂、一九九六年）を参照。

4 これについては拙著『教派神道の形成』（弘文堂、一九九一年）を参照。

5 閲覧可能なものの選別に際しては、祖神道教団の松下敬子氏に全面的なご協力をいただいた。第一段階でのこの協力が得られなければ、本稿で行ったような大量の郵便・電信の分析はできなかったと考えている。

6 加藤神社については拙論「異文化内状況と神社神道」（柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教』、東京大学宗教学研究室、所収）、一九八一年を参照。

7 近代新宗教に関する議論は、拙論「グローバル化時代の近代新宗教とポスト近代新宗教」中牧弘允・ウエンディ・スミス編『グローバル化するアジア系宗教』（東方出版、二〇一二年、所収）を参照。



## 謝辞

本研究で扱ったきわめて貴重な資料の閲覧を許可していただいた祖神道管長の松下延明氏と資料の閲覧に際してのさまざまな便宜を図っていただいた同教団の松下敬子氏に篤く御礼を申し上げたい。教団関係者の学術研究に対する深い理解が得られなければ、こうした研究は着手すらできなかった。

また膨大な資料はすでに半世紀以上を経た郵便物であるので、判読が難しいものもあったが、そこから発信地や発信の日時、また依頼の概要を読み取る基本的な作業は非常に時間のかかるものであった。この間に國學院大學大学院の次の各氏には、根気の要る基礎的作業にお手伝いいただいた。とくに藤井麻央氏には、データの照合と内容面の整理にもお手伝いいただいた。この場を借りてこれらの

方々に篤く御礼の言葉を申しのべたい。

大洞友美子氏、杉内寛幸氏、情野梢氏、玉置麻衣氏、藤井麻央氏、宮崎浩一氏（五十音順）。